

# 生薬ニュース

近畿大学東洋医学研究所附属診療所調剤室

## 今月のピックアップ

じゅつ  
朮

### ジュツとは・・・

現在わが国で使用される『朮』には、『白朮（ビャクジュツ）』と『蒼朮（ソウジュツ）』があります。それぞれ違う植物ですので紹介します。

**ビャクジュツ** : *Atractylodes japonica* (オケラ) または、オオバオケラ *Atractylodes macrocephala* の根茎で、日本では生産がなく中国産が流通しており調剤室でも中国産のものを採用しています。

**ソウジュツ** : *Atractylodes lancea* (ホソバオケラ) または、*Atractylodes chinensis* の根茎で中国東部～東北部で生産されています。

下の写真では花の色の違いに目が行くかもしれませんが、通常はどちらも

淡赤～淡紫白色をしています。

【性味】 ビャクジュツ：苦、甘、温 ソウジュツ：苦、辛、温

【薬効】 ビャクジュツ：補気健脾、燥湿利水、固表止汗、  
祛風湿、安胎

ソウジュツ：燥湿、解表、健脾、運脾、祛風湿

### ジュツの成分・・・

ビャクジュツとソウジュツでは、どちらも主な含有成分は精油ですが、ビャクジュツには精油成分であるアトラクチロン、ソウジュツには同じ精油成分のアトラクチロジンのほか、ヒネソールというソウジュツ特有の析出成分も含まれています。クロマトグラフィーという成分の分析を行うと、それぞれ違う場所にスポットを有します。『朮』と一概に言っても、ビャクジュツとソウジュツが違う生薬であることが、これからも伺えます。

※注釈：現在局方ではソウジュツにもアトラクチロンを含むこともあることから、アトラクチロジンの有無でビャクジュツとの区別を規定しています。（→3項参照）



↑ソウジュツ

ビャクジュツ ↓



## ビャクジュツは実は身近に・・・

ビャクジュツは古くから私たちの生活にとっても身近な生薬なのです。ご存じの方もいらっしゃるかもしれませんが、春の山菜としてオケラはよく知られていますね。また、お屠蘇（トソ）の材料として用いられたり、ビャクジュツを土蔵の中で燻すことでカビ除けとして利用されたりもしてきました。

京都の八坂神社では毎年大晦日に『をけら参り』が執り行なわれます。この際用いられる“をけら火”はオケラを燃やした火が使用されており、その強いにおいで邪気を祓い一年の無病息災を願う行事として知られています。

### ビャクジュツを含む方剤・・・

かみきひとつ  
**加味帰脾湯**

(体力が低下しているひとの貧血、不眠症、情緒不安定、  
神経症)

ごれいさん  
**五苓散**

(水瀉性下痢、急性胃腸炎、暑気あたり、むくみ)

じゅうぜんたいほとう  
**十全大補湯**

(体力低下、疲労倦怠、食欲不振、手足の冷え)

によしんさん  
**女神散**

(産前産後の神経症、月経不順、血の道症、更年期障害)

りっくんしとう  
**六君子湯**

(胃腸の弱いもので、食欲がなくみぞおちのつかえなどがあるものの胃炎、消化不良、食欲不振、嘔吐など)

### ソウジュツを含む方剤・・・

いれいとう  
**胃苓湯**

(食あたり、冷え腹、暑気あたり、急性胃腸炎)

へいいさん  
**平胃散**

(急性・慢性胃カタル、胃アトニー、消化不良、  
食欲不振)

そけいかっけつとう  
**疎経活血湯**

(関節痛、神経痛、腰痛、筋肉痛)

### ビャクジュツ・ソウジュツ両剤を含む方剤・・・

はんげびやくじゅつてんまとう  
**半夏白朮天麻湯**

(胃腸虚弱で下肢が冷え、めまい、頭痛、頭重などがあるもの)

にじゅつとう  
**二朮湯** (五十肩、四十肩)

ソウジュツ：  
表面に白い埃のよう  
なものがヒネソールが  
結晶化して析出した  
もの



ビャクジュツ



## ビャクジュツの具体的な使い方・・・

ビャクジュツは前述したとおり、苦・甘・温の性味を持ち、脾胃（現代では腎臓と消化管のこと）を助けて気を補う作用があるといわれています。体力が低下し寝汗をかきようになった人に合う生薬としてオウギと共に知られています。また、オウギとの組み合わせで脾胃の機能を向上させて皮疹の改善も期待できます。他にビャクジュツのよく知られる効果として『利尿作用』があります。この作用は非常によくできており、身体にとって余分な水分のみを尿として排出する作用であり、必要な水分については保持します。ウイルス性腸炎などで嘔吐下痢が繰り返される場合、ビャクジュツを含む五苓散を使用することで、脱水を防ぎ下痢症状を改善します。

## ソウジュツの具体的な使い方・・・

ソウジュツは発汗には不適です。下痢や嘔吐なども起こすと脱水症状になりますが、ビャクジュツと違いソウジュツにはそのような症状の時に身体の中の水分を調整する作用はありません。しかし、胃腸の症状を改善する目的ではソウジュツはとてもよく働いてくれます。例えば、『平胃散』という方剤にはソウジュツが6g/日も含まれています。これはソウジュツの薬能が最も発揮される処方と言われており、食べ過ぎて食べたものがいつまでも胃に滞り、胃が重苦しい、げっぷが出る、また下痢（腸炎の時のような水溶性の下痢をではない）を起こしたりといった消化器の症状を訴える人に用います。

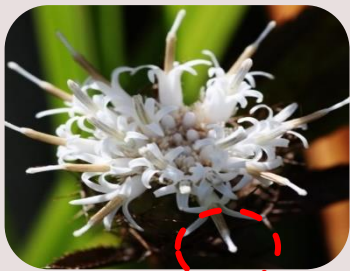
## ソウジュツとビャクジュツが混ざる・・・？

何をもって植物を区別するのか、これはとても大切なことです。見た目の違いも重要な要素ですが、薬学的な視点では、“その生薬から抽出される決められた成分が一定量含まれている”ということが必須となります。

『ジュツの成分』の項でも述べたように、ビャクジュツからはアトラクチロン、ソウジュツからはアトラクチロジンが検出される

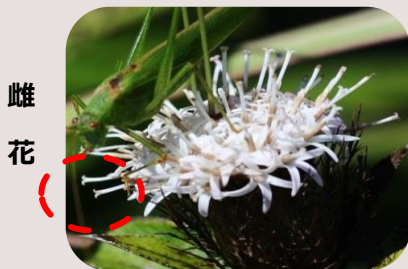
のがもともと区別するための方法でした。しかし、一部のソウジュツからもアトラクチロンが検出されることが分かり、アトラクチロンがビャクジュツ特有の成分でないという認識が広まりました。このため蒼朮の企画を緩和して、『ビャクジュツにアトラクチロジンが含まれていないこと』が同定の条件となりました。ではなぜこのようなことが起こるのでしょ。その理由として、ソウジュツとビャクジュツの開花時期が少し重なっていることが原因と考えられています。朮類の花の構造は開花初期は雄性期（ゆうせいき）でその後雌性期（しせいき）に変化します。これはアザミ類と同様で、雄花状態で花粉を供給する状態から受粉可能な状態に変化するのです。ビャクジュツの開花の後にソウジュツの開花の時期が来るため、漂っているビャクジュツの花粉が開花を始めたばかりのソウジュツの雌花に受粉するのです。ビャクジュツの花粉と交配した趣旨から生まれたソウジュツからもアトラクチロンが検出されるのです。

少し難しい内容だったかもしれませんが、漢方薬は植物が原料ですので、植物についての深い知識も必要とされます。



雄花

上の雄花では花柱の先端が開いていないが、下の雌花では成熟して開いているのがわかる。



雌花